

同窓会誌

66



特集 「支部活動の活性化をめざして」

- ・支部交流会
- ・支部活性化の動き（支部からの声）
- ・支部新設の動き

島根大学教育学部同窓会

目次



母校今昔……………表紙裏
巻頭言 教育について思うこと ……教育学部同窓会理事長 舟木 賢治 (2)

教育学部最前線

「小川巖新学部長に聞く」—教職大学院の構想について— (4)

特集 「支部活動の活性化をめざして」 (10)

□支部交流会…………… (11)
□支部活性化の動き(支部からの声)…………… (15)
□支部新設の動き…………… (20)

教育学部ホームカミングデー…………… (21)

□シンポジウム「地域で活躍する教育学部の卒業生と現役生」
・報告者・角 拓哉…………… (22)
・永井慶彦…………… (23)
・多久和祥司…………… (24)
・コメンテーター・品川隆博・柳野幸敬…………… (26)
□シンポジウムのあらし…………… (27)
第8回島根大学ホームカミングデー…………… (28)

私の研究紹介…………… (29)

ご退職の先生を送る…………… (31)

第3回教育振興奨励賞決定…………… (51)

専攻だより —研究室はいま—…………… (33)

平成25年度島根大学教育学部卒業研究題目一覧…………… (60)
平成25年度島根大学大学院教育学研究科修士論文題目一覧…………… (66)

ただいま活躍中!!…………… (44)

母校今昔(続)…………… (46)

近況報告

本部だより…………… (48) 有志会・同期生会だより…………… (52)

同窓会規約の一部が改正されました…………… (68)

事務局より…………… (9)(59)(70)(71)(72)(73)(74)(75)
受贈図書紹介…………… (59) 表紙に寄せて・編集後記…………… (76)

島大「学生食堂」事情

島大の現在の学生食堂は、第1食堂と第2食堂の併用で運営されている。以前も同様に2つの食堂で運営することによって、学生に食事を提供し、また利用する学生の混雑解消に大きな役割を果たしてきた。

【以前の第1食堂と第2食堂】



以前に第1食堂があった学生センター

昭和37年（1962年）に学生会館（現在の「学生センター」の建物）が完成し、昭和27年（1952年）から学生集会所付設としてあった食堂が学生会館に移転した。この第1食堂（当時は「会館内食堂」という名称であった）のホールの広さは、175㎡、座席数は140席であった。

当時の学生数は文理学部と教育学部の2学部で約1300名台であったが、この半数以上が昼食時に殺到するので毎日長蛇の列が続いた。

昭和40年（1965年）に県立農大の国立移管に伴い利用者が激増したため、昭和41年（1966年）に第2食堂を増設した。（その後第2食堂は現在の「学生支援センター」付近に移転している。）しかし、その後も両食堂は混雑がひどく、利用者の不便は一向に解消しなかった。

【現在の第1食堂と第2食堂】

昭和48年（1973年）に現在の第1食堂が完成する。ホールの広さは450㎡で、座席数480席であった。

しかし昭和55年頃になると、学生数約3000名を想定して建てられた第1食堂は、文理学部改組により約4300名になった学生への対応が難しいこと、また、カフェテリア方式（好みの料理を自分で選ぶ）、メニューは軽食・麺類中心のものに加えて高級食堂化（ランチ中心）といった多様化が求められるようになったことなどにより第2食堂の建設が叫ばれるようになった。

そこで、昭和60年（1985年）に現在の第2食堂が開始され、現在に至っている。



現在の第1食堂と第2食堂

※P47～46に関連記事を掲載しています。



教育について思うこと

教育学部同窓会理事長

舟木賢治

本年度より、理事長を務めさせていただくことになりました。齋藤前理事長には八年もの長い間大変お世話になり、心より御礼申し上げます。後任として微力ではありますが、教育学部同窓会の活動を一杯支えてまいる所存ですので、何とぞよろしくお願い申し上げます。

近年、教育学部は度重なる学部改組と法人化により大きく変容しましたが、今後さらに、教職大学院設置等による大きな改革が求められております。このような状況下にあつて、学部教員も教育・研究にじっくり取り組むことがますます困難になることが懸念されます。

学生はというと、以前より学力やモチベーションの低下が指摘されてきましたが、その傾向はますます深刻になってきています。また、子どもたちの育ちをみても、「生きる力」が低下しているのは明らかであり、これまでの教育の在り方をあらためて問い直さなければならぬ時を迎えていると思います。

「生きる力」で思い浮かぶのは、かつてよく耳にした「雑草のような逞しさ」という言葉です。「生きる力」は、人によってさまざまにとらえ方ができますが、その根幹をなすのは、踏まれても踏まれても立ち上がる雑草のような強さではないでしょうか。人生で遭遇するいかなる困難な状況にも負けず、回復する力（レジリエンス）こそが幸



せになれる力であり、教育において育まなければならない根源の力であると思います。このレジリエンスを育むためには、「強力な社会的レジリエンスの存在するところには、必ず力強いコミュニティが存在する」(『レジリエンス 復活力』須川綾子訳、ダイヤモンド社)と指摘されているように、人間の信頼関係や結びつきが重要な鍵となっているといえます。現代社会においては、人間関係が希薄化し、多くの教育システムが機械化して非人間的になっています。また、大人の価値観が優先され、子どもたちが「創造の翼」を広げて夢を描くことが難しくなっています。このような現状を打開するためには人間教育が重要であり、教育界が地域の人々とのつながりや人間関係のネットワークを構築し、信頼関係を回復することによって活性化されなければならぬと思います。

現在、教育学部では学部教育の柱として学生の体験学習を実施するとともに、教育現場や地域社会との連携を推進しています。先日(十月十二日)のホームカミングデーの学部企画において、これらの取り組みの一端が報告され、参加者全員で意見交換が行われました。そのなかで、学生たちがこれらの取組みをとおして着実に成長し、地域社会も活性化されていく契機となることを実感しました。

今後も、教育学部同窓会として学部教育を支援するとともに、少しでも社会的レジリエンスを高める活動が展開できればと願っています。

〈舟木賢治氏プロフィール〉

島根県出身

専門は生物学 所属は人間生活環境教育講座